

昭和ガス

お寺に災対バルク設置

大應寺 地域の避難拠点に

埼玉県富士見市の「水光山・大應寺（すいこうざん・だいおうじ）」には、災害時の備えとして十のガス取り出し口がついたバルク貯槽と炊き出し用機

器が備蓄してある。「宗教的な面以外にも地元に貢献できれば」（深谷雅良住職）との考えから、LPGガス供給者である昭和ガス（本社・埼玉県三芳町、高橋政宏社長）の提案を受け入れた。敷地面積約七千平方メートルの境内を持つ同寺は、栗師縁日などの恒例行事で地域住民らが集まる機会も多く、深谷住職は「災害対策バルクを使った 炊き出し訓練も検討したい」と話している。



バルク横の倉庫には炊き出し用の燃焼機器が備えてある

大應寺
武彦社長

設置にあたっては、日本LPガス団体協議会が窓口となる国の「平成十九年度

LPガス安定供給対策事業（災害用バルク設置補助）」を活用した。補助条件である「設置先は十件以上」をサイ

がとりまとめ（十一件）、取引先である昭和ガスに設置先を求めた。「災害時に人寄せができればお寺が一番理想」。同寺の檀家でもある昭和ガスの高橋政一会長は真っ先に声をかけたという。

齋場でもある「観音堂」の脇に今年一月、設置を完了した。三百リットル貯槽を中心とした供給ユニット（矢崎計器製）と、隣の倉庫には三重巻（ころ三台、二重巻き五台、五升炊飯器三台）が収納してある。常時供

給が補助金交付の条件になっているため、日常は堂内の給湯器とガスレンジに供給している。

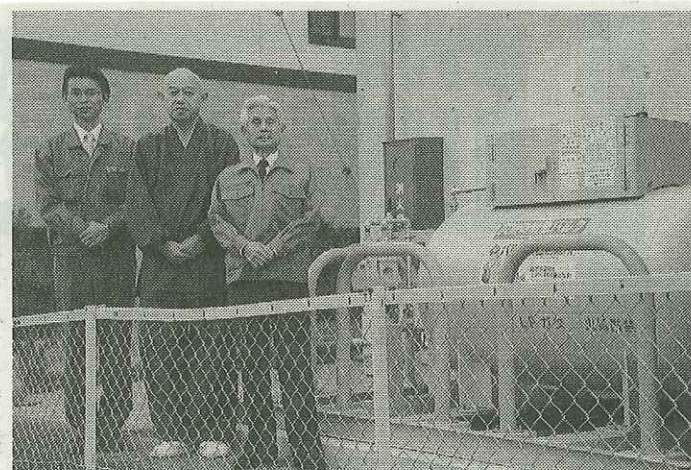
不動明王を本尊とする同寺は、創建の記録は残っていないものの開山の祖・賢憲和尚（天文十七年没）以来、深谷住職で三十四代目を数える。宗教拠点として歴史を刻むとともに、明治以前は寺子屋として地域教育の拠点に、戦時中は子供たちを預かるなど、地域の寺としてさまざまな役割を果たしてきた。

「寺院というのは、半分は公的なものと考えており、どんな形でも貢献できればという願いがある」と話す深谷住職。二千二百カ寺が加盟する埼玉県佛教会の専務理事ほか、各種地域団体の要職も務め多忙な日々を送っている。「災害バルク補助制度」は、災害発生直後の数日間

に土地などを避難場所として提供する企業や、避難が困難な人を抱える病院などを対象に、常時使用を条件として設置費用の一部を補助する。

バルクユニット一式と燃焼機器類を「一設備」とし、これを十設備以上とめることで一件の申請とみなす。二十年度は「一設備」当たりの上限額を六十万円

と、前年から十五万円増額したとともに、燃焼機器類の必要数も削減し利用しやすくした。十二月十五日まで日団協補助・受託事業室で受け付けている。



災対バルクの前で。左から高橋社長、深谷住職、高橋会長